親と同居する地方の若者の将来設計

18H2090　　澤田　優斗

１．はじめに

1-1. 研究テーマ

親と同居する若者（以下、成人子）は自立していないと言えるのだろうか。成人子の自立は離家と共に語られることが多く、親との同居は依存として扱われてきた。確かに、親と同居し経済的に安定した生活を送ることで、将来への貯蓄や現在の消費についての可処分所得が確保できる。あるいは若者の貧困化状況から成人子が親と同居し続けるしかないという状況も現実に存在する。しかし、親との同居という形式だけから成人子が自立しているか依存しているかという状況は判定できない。また、親が成人子の離家を望まない場合も考えられ、成人子のニーズからのみ自立か依存かの二者択一で考えることもできないだろう。

本研究では、成人子自身の「自立する」ことに対する考え方を「将来設計」として、かれらの親の意向についての見方も考慮に入れ、成人子の同居親子関係についての意識とかれらの将来設計との関連を調査する。

1-2. 先行研究

近年、青年期から成人期への移行期の長期化（ポスト青年期の出現）が問題になっている。1990 年代以降の経済的停滞により、就業状況の悪化から成人子の貧困化、ひいては晩婚・非婚化が深刻化した。宮本（2017）は、岩手県・山形県で 19-34 歳の不安定就労者 48 名に対し聞き取り調査をおこない、成人子の移行と親子関係についての意識を明らかにした。この研究は、不安定就労の状態にある成人子が、親と同居することを住居費軽減などの「戦略」としていることを強調している。そこでは、成人子の自立の可否は親の財力などの条件により決まってしまうことになる。

米村（2010）は、情緒面や親子のコミュニケーションに着目し、成人子の自立意識と親元での同居を続けることの関わりを研究した。この研究は二つの調査を行っている。①20 歳代（子世代）と 50 歳代（親世代）に行った調査票の親子関係に関する自由回答の分析、②同じ事項に関する 50 歳代へのヒアリング調査である。米村は、親子間での非対称性（上下の力関係）を顕在化させず、対等な関係を表現するコミュニケーションのあり方などに着目し、親子同居状態のなかでも、成人子が親の干渉から適度な距離を置き自律性を獲得することが可能でありかつ重要であると述べた。

1-3. 研究目的

家族社会学では子の自立過程は離家に着目して語られてきた。宮本（2017）のように若者の貧困化に焦点をあてて考える場合、成人子は貧困状態から親と同居せざるを得ず、離家が

遅れ、移行期が長期化すると議論される。しかし、米村（2010）のように離家という形式にとらわれず成人子の自立意識に着目して考える場合、親との同居状態にあっても自立が可能であること、そして実際の親子同居下の自立のあり方が議論されるべき問題となる。

本研究も米村同様に、離家という形式よりも成人子の自立意識に着目する。親との同居が成人子の将来設計（移行の見通しや自立意識）にどのように影響を与えるのか、同居関係のなかでの成人子の自立意識のあり方はいかなるものなのかを明らかにする。

２．研究方法

本研究のおもな調査方法は、インタビューによる聞き取り調査である。親と同居する 20 歳代前半の、筆者と同年代の成人子を対象とする。調査対象者らが暮らしているのは、おもに弘前市の近郊農村である平川市であり（6 名中 5 名）、1 名は西目屋村である。

表 1 は本研究におけるインタビュー対象者のプロフィールである。成人子本人の性別やきょうだい順位、家業の有無などの条件は、親が成人子にもつ期待を左右すると考えられるし、学歴や職業は成人子本人の将来の経済状況を左右する。つまり、それぞれ彼らの将来設計に関わると考えられる。

表１　対象者プロフィール

	年齢	性別	学歴	職業	同居家族	家業
A	21	男	高卒	公務員	祖父、祖母、母、妹	（母；介護士）
B	21	男	大卒予定	大学生	祖母、父、母	（父；元公務員）
C	21	男	大卒予定	大学生	母、姉、妹	農家（専業）
D	20	女	高卒	事務職	父、母、兄	農家（兼業）
E	20	女	高卒	無職	父、母、姉	農家（兼業）
F	20	女	大卒予定	大学生	祖父、母、父、兄2人	（非農業）

３．親の期待と成人子の将来設計のあり方

成人子は、娘・息子、きょうだい順位、学歴などの属性により親から受ける期待が異なることが考えられる。また、そのことは成人子も（同意するかどうかは別として）了解しているため、親の意向を反映し将来設計を行うと考えられる。本人の希望は将来設計において就職先地域の選択、離家のタイミングなどに表れる。成人子に対して離家を望まない場合の親の意向は、家業・イエの跡継ぎや自身の老後の介護などが考えられる。だとすると、成人子らは自身の希望と、了解している親の意向とのあいだで折り合いをつけたり、葛藤を感じたりしていることだろう。

3-1．離家の理由

成人子の離家に関して、親の影響が最も大きくみられるのは結婚のタイミングでの離家

である。調査の結果、娘は、一般的な直系家族的規範から、親が結婚時点での離家を期待していることを考慮し、息子は、結婚後の実際の親との生活の想定次第で、離家するかどうかを決定していることがわかった（但し、男性 A～C はすべて長男）。

D さん（女性）は親から結婚して離家することを期待されており、しかも長男である兄が結婚後も親と同居生活を営むことを期待されていることを了解している。そこから、兄が結婚した場合には、自身の結婚とは別に離家を考慮している。兄 2 人ともが実家に同居している F さん（女性）は、自分が結婚し「他人と一緒に暮らす」ということは現時点で想像できないと言う。このことは親とも話したことがあるが、彼女の結婚・離家について、親はその考えを「そぶり」で示したこともないのだが、一般的に言えば、親は娘の結婚・離家を想定しているのだろう、と述べる。その F さんも、就職したら離家して自立という考えは「さすがにお金入って、自分で生活立てていけるようになったら、たぶん一人暮らしはするようになるのかなー。…やっぱり自立していかないとだめなのかなって」のように表明している。

一方で、親から「家に居ろ」と言われているという A さん（男性）は、親の性格から自身の結婚相手と諍いが起こると考え、結婚時点での離家を想定している。また、母親が同居を望んでいることを知っている C さん（男性）も、結婚後は離家して、自分の家族を中心として生活をつくりたいと思っている。母親やきょうだいとは「ちょうどいい距離感を保っていたい」ので、二世代同居は「疲れる」と述べている。

3-2. 親の家業

親の家業（ここで扱う事例は農業）については、成人子の職業選択のみならず、離家するかどうかの選択にも影響を与える。例えば、親が家業をもっている場合、長男が家業を継ぐという選択をすると考えられる。しかし現在、子が親の家業（農業）を継ぐことは前提ではなくなっている。実際に、調査対象で家業が農業である C（男性）、D、E（ともに女性）の場合も、親の家業を継ぐという想定はない。また、家業とのかかわり自体が薄く、親も後継を期待していない（継がない、という了解が成立している）と考えている。

長男である C さんは父親が別居状態ということもあり農業を手伝ったことがなく、農家の娘である D さんは親が自身の代で家業を辞めることを宣言していて、自身は結婚時点で離家するつもりであり継ぐつもりはない。さらに、E さんは「絶対（手伝い）しない、無理だ」「虫が苦手である」などそもそも自分は農業に不向きだという理由で後継を強く否定している。

3-3. イエの跡継ぎ

家業とは別に、家の財産（家屋や土地）、あるいは「墓を守る」など、イエの跡継ぎという課題がある。とくに長子はイエを継ぐために親と同居することが考えられる。だが、現在は同居状態にあって、親の期待（イエの跡継ぎ）に応えているようにみえても、長子自身はそれを強く意識しているわけではない場合がある。

いずれも長男であるAさん、Bさん、Cさんの事例をみよう。Aさんは、親から「母親の身になにかあったら」ということや「イエを継ぐ」ことのために家に残ることを求められている。Aさん自身は将来のことはわからないし、結婚して離家もありうると述べており、働いている現在も同居を続ける理由としては、経済面と利便性（地方都市近郊）とを挙げている。またBさんは、親がおそらくBさんの学卒後の就職先地域の選択幅を狭めないよう気遣って「家は売ってもいい」と述べたことがあると言う（Bさんは弘前市内での就職先をさがしていた）。彼は、現在も同居を続ける理由として親の健康が心配であることを挙げており、「実家にこのままいるなら家を継ぐ」と述べた。Cさんは3-1.で述べたとおり、他の二人と異なり結婚して離家することを現時点で考えている。

以上のようにイエの跡継ぎに関しては、事例の多様性がある。AさんとBさんとの例でわかるように、イエを継がせることについての親の態度も、積極的・消極的と分かれている。また、長男であってもCさんのようにイエの跡継ぎを明確に否定し離家を積極的に将来設計に入れている場合もある。

3-4. 親の介護

親の介護については、長子に限らず、次男以下や娘らにも期待がかかるし、同居に限らず近居という選択肢も想定される。親子間の情緒的な関係は離家の有無にかぎらず保たれるかもしれないし、また、一般に親子関係規範から成人子は親の面倒をみることが求められるだろう。

調査結果からも、実際にそのような意識がみられる。成人子が離家を語る際に、親が心配だから近居したいという語りである（Eさんを除く5人）。親が年をとって、もし体調を崩したときのために（Bさん）、「母親とかに…なんかあった時にすぐに駆けつけられればいいかなって思う」（Cさん）などの語りがそれにあたる。「結婚は想像できない」（3-1.）と言っていたFさんは、兄らが結婚するなら、独身者である自分が親の面倒をみに定期的に実家に通いやすいだろうと述べている。

3-5. まとめ

同居していることで、直接・間接に親の言動から期待を知る機会が多く、成人子は親の期待を了解したうえで自分の将来設計を行うことになる。自身の希望が親の意向と一致しない場合は、親の期待に反し離家するが近居して介護に関わるなど、自身が親に対して負うべき役割と自身の希望が同時に果たされる将来設計を行う場合もある。また、家業の承継にみられるように、親がそもそも子の希望を考慮して影響を与えないようにする場合もある。このように成人子は、親からの期待にそのまま従う（あるいは面従腹背の態度をとる）のではなく、負うべき役割を考えたうえで、親と対等に支え合う事の出来る将来設計を行っていると考えられる。

４．親と同居を続ける積極的意味：同居のメリットと自律

親からの同居の期待とは関わりなく、成人子にとってのなんらかのメリットから積極的に親との同居を続ける理由がある。親とのレクリエーション的な交流・仲の良さ、ゲームなどの自分のオタク的趣味への時間・経済資源の投入などである。これらは成人子にとっての同居のメリットであり、場合によっては「親に依存している」とみられる要因ともなる。そのため、ここでは成人子と親との関係が、ほんとうに一方の他方への依存という関係でしかないのか、いう点をみていく。

ここで重要になるのは自律という観点である。自律とは自立の要素の一つであり、他律の対義語である。成人子の自律という場合は、親から干渉されない主体性を表すものである。自立の概念にはもう一方に独立という要素があるが、独立は離家や独自生計などの形式面を指す。（藤井 2008）

4-1. 親との交流・仲の良さ

成人子には親との間で趣味を共有することや、休日に行動を共にするなどの、友達のような良好な親子関係がみられた。成人子の趣味であるキャンプに家族を連れていくこと、働いている親と休日が重なった際に買い物に出かけることや、家族を旅行に連れていきたいという希望を持つことなどである。例えば C さん（男性）は、大学の友人と始めたキャンプを、家族ともするようになった。「最近キャンプとか家族ではまって、母親がめちゃくちゃはまってて」頻繁に日帰りキャンプに家族で出かけると言う。

ここには、親が子に一方的に干渉するような上下関係はみられない。米村（2010）が述べたように、親子間で互いに独立性をみとめ、対等な関係にあることが自立意識を高める要素になっていると考えられる。

4-2. 趣味と所得の使い方

調査対象の成人子には男女に関わらず、ゲーム、マンガ・アニメ、YouTube 視聴などのオタク的趣味消費がみられた。これらの趣味はインターネット等の発達により地方でも大都市圏と遜色なく楽しむことができる。そのため、親と同居することで出費を減らし可処分所得を趣味に費やすことは合理的ともいえる。これだけでは、成人子たちは生活面で親に依存し、趣味を楽しんでいるように見える。

有職者であるＡさん（男性）とＤさん（女性）の例をみる。まず、Ｄさんは家計を助けるために月 6 万円を家に入れている。実家の家計で必要な額を把握し、親とともに実家の家計を支えていると言ってよい。次に、Ａさんは「大人の証明」として月２万円を家に入れているものの、家計は把握できてはいない。このように、成人子は家計にお金を入れている場合があるが、事例によって対等な関係を親と結んでいるかどうかがちがってくる。特にＤさんの場合は主体的に親を援助しており、自律の側面がみえる。Ａさんの場合は、家計として入れているというよりは、家計に貢献しているという体裁を保つための入金であり、依存し

きっている状況ではないものの、自律しているとは言いがたい。

4-3. まとめ

以上のように、成人子は親との同居状態にあっても、必ずしも一方的に依存してはいるわけではない。親との対等な関係意識を持つことで、親に干渉されない自律性を持つ存在となっている場合がみられる。そうした場合においては、親と同居する成人子とは、同居という形態のもとで、お互いにあるていど独立をたもちながら情緒的にはつながりあい、相互扶助的な関係にあることが明らかになった。

５．考察

本研究では親と同居する成人子の自立意識に着目して、成人子への聞き取り内容を分析してきた。まず、成人子は親を支える立場にあることを自覚し将来設計をしている。そこには、かりに現在は親に経済的に依存している状態であっても、これが将来にわたって長く続くという想定はない。

将来の離家タイミングは、就職や結婚の時点を想定しており、離家するかしないか、近居などの選択について親の意向や、将来的な結婚相手と親との関係をも勘案したうえで離家・同居・近居を想定している。また、親との情緒的な繋がりは一般的な親子関係規範と同様に重視されており、親の老後の面倒をみることについては強く意識されている。一方で、将来の家業継承、イエの跡継ぎについては、成人子は否定的な意見をもっているか、調査時点でかならずしも明確な意識はみられない。

有職者については、明確に実家の家計を把握して実質的な貢献を果たそうとする者も、「大人の証明」のように象徴的な貢献を果たそうとする者もいる。調査対象者の半数を占める在学中の大学生も、卒業・就職後に離家しない場合は、やはりそれらのいずれかの途を採るだろう。

以上のように、親子同居の状況下に置かれた成人子の課題は、一般的な自立とは異なり、親子関係のなかでの自律と言えるだろう。本研究では、米村（2010）にならい、経済面に限らない親子関係意識全般について聞き取り調査をおこなった。それを成人子の属性や実家家業の有無（3 章）、または現在と将来にわたる親子関係にかかわるトピック（4 章）に分けた上で検討してきた。親との同居をそのまま依存と捉えるしかたは、成人子に特定の自立観を強要することにもつながりかねない。成人子の移行を考える際は、同居のうえで親を支える成人子、そしてその成人子の抱える課題という視点も重要となるだろう。

参考文献

藤井吉祥（2008）「親子関係における成人子の「自立」」、『教育科学研究第 23 号』、pp.21-30
宮本みち子（2017）「成人子の自立に向けて家族を問い直す」、『地方に生きる若者たち：インタ

ビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』、旬報社、pp.57-82.
米村千代（2010）「第 4 章　親との同居と自立意識—親子関係の‘良好さ‘と葛藤」、『〈成人子と親〉の社会学』、pp,83-10